64th RECITAL 【1996 年（平成 8 年）1 月 20/28 日】 神戸文化ホール/フェスティバル

5th Stage

男声合唱組曲「中原中也の詩から」

北の海
汚れっちまった悲しみに
間奏曲
雲雀
六月の雨
月の光

作　詩　中原　中也
作　曲　多田　武彦
指　揮　北村　協一

中原中也の詩から

■解説

中原中也記念館・館長　福田百合子

中原中也の人と作品
－「風」の声をきく－

関西学院での学生生活の間、いつも私の心の中を吹き抜けていたのは、ポプラを渡る風の音だったような気がする。

遠く神戸の街の灯を望み、六甲山脈の緑を背に上ケ原のキャンパスには、丈高いポプラ並木が風にそよいでいた。
青春詩人、中原中也も「帰郷」という作品で次のように歌っている。

これが私の故里（ふるさと）だ
さやかに風も吹いてゐる

あゝ　おまへはなにをして來たのだと・・・・・
吹き來る風が私に云ふ

今回、関西学院グリークラブリサイタルに中也の詩の中から、いくつか取り上げられ、組曲として演奏されることになったと聞いて、感慨無量である。
「北の海」からは、日本海の潮の香がするようで、「汚れっちまった悲しみに・・・・・」という呟きからは、若い日の悔恨の声が響く。
「雲雀」の中の菜の花畠や、電線の揺れはふるさとの野や山の風景でもあろうか。
「六月の雨」という作品には、特別の思い入れがある。昨年一月の阪神大震災に際して倒壊した家屋の壁土の下に埋もれた原稿なのだ。九死に一生を得て救出された原稿の所有者から、遙々、ふるさと山口、湯田温泉・中原中也記念館にご寄贈いただいた詩篇である。作者の筆跡のインクの色も薄れがちに、しかし無傷で、はっきりと生原稿の力強さをもって迫ってくる。作品と、人と人との出合いの不思議さを改めてかみして直した。
「月の光」のギタアが奏でる幻想の楽曲。
青春の抒情と、ダダイズムの新鮮さと、フランスの象徴詩や、古典的和歌発想の幽玄を取り集め、交錯させながら、今、詩人中原中也の魂が若者たちの生命を通して伝わってくる。
さやかな「風」の声に耳を傾けよう。

中　原　中　也

■略年譜

明治40年	山口市湯田温泉に生まれる。
大正9年（13才）	県立山口中学校入学。
大正12年（16才）	京都の立命館中学に転校、京都の移る。
大正14年（18才）	長谷川泰子と共に東京に転居。小林秀雄を知る。
昭和4年（22才）	河上徹太郎、大岡昇平らと『白痴群』を創刊。多数の作品を発表。
昭和8年（26才）	孝子と結婚。『紀元』『四季』等の同人誌に「帰郷」「少年時」等を発表。『ランボオ詩集〈学校時代の詩〉』を翻訳・刊行。
昭和9年（27才）	長男・文也誕生。詩集『山羊の歌』刊行。
昭和11年（29才）	『文学界』『四季』他に「一つのメルヘン」等、多数の詩を発表。『ランボオ詩抄』を翻訳・刊行。長男文也病没。
昭和12年（30才）	千葉市の中村古峡療養所に入院。鎌倉に転居。『ランボオ詩集』刊行。『文学界』に「冬の鳴門峡」「春日狂想」等を発表。詩集『在りし日の歌』詩集を終了、現行を小林秀雄に託す。10月上旬、結核性脳膜炎発病・入院 22日永眠。
昭和13年	詩集『在りし日の歌』刊行。

■改めて追悼の意をこめて

多田　武彦

今でも、多くの報道を通じて関西大震災の傷跡の大きさを知るにつけ心が悼む。その折々に私はその場所で、祈り続ける。

1945年3月、戦火で私の生家も丸焼になり、恩師や多くの友人知人が亡くなり、悲嘆にくれた私は祈り続けた。だから、亡くなられたかたやそのご家族、家財を失われたかたがたのお気持ちを思うと、一入心が悼む。

しかしこの深い悲しみを乗り越えて、再建の一歩を踏み出された多くのかたがたの報道を見るたびに、人間の尊厳と力強さに新しい感慨が起こった。関西学院グリークラブの諸君も多くの苦難を乗り越えて立ち上がられた。昨年の四連・同関合同の各演奏会に見られた至芸が、そのすべてを物語っている。

第64回リサイタルに私の作品を取り上げていただき、厚く御礼申し上げたい。

私が、詩人中原中也先生の詩に始めて出会ったのは、1947年旧制大阪高等学校一年の時クラスメイトとの学力の差が開き、悩んだ末、当時の国語の担当であった犬養孝先生（万葉集研究の大家）に相談した処、先生は、「君は作曲の勉強を始めているそうだから、撓まずにそれを続けなさい。それから、書物のリストを上げるから、読みなさい」と励まして下さった。このリストの中に、中也の詩があった。

何度も読み返し、いくつかの独唱曲を作った。この内の「北の海」「汚れっちまった悲しみに」「雲雀」「六月の雨」「月の光」は今日演奏される組曲「中原中也の詩から」に移行しているし、「米子」「早春の風」「閑寂」「また来ん春」「冬の日の記憶」「冬の長門峡」は他の組曲に配置されている。いずれも、青春の悩める日々の中で綴った旋律だけに、65才の老人にとっては、只管懐かしい作品である。

演奏会のご成功と今後のご健闘を祈る。